よだかの星（ほし）

宮沢賢治（みやざわけんじ）

よだかは、じつに、醜い鳥です。
顔は、ところどころ、味噌をつけたように、まだらで、くちばしは平たくて、耳まで裂けています。
足は、まるで、よぼよぼで、わずかたりとも、歩けません。
ほかの鳥は、もう、よだかの顔を見ただけでも、嫌になってしまう、という具合でした。
たとえば、雲雀も、あまり美しい鳥ではありませんが、

よだかよりは、ずっと上だと思っていましたので、夕方など、よだかに会うと、さもさも嫌そうに、しんねりと目をつぶりながら、首をそっぽへ向けるのでした。もっと小さな、おしゃべりの鳥などは、いつでも、よだかの真っ向から、悪口をしました。

「ヘン。また出て来たね。まあ、あの、ざまをごらん。ほんとうに、鳥の仲間の、つらよごしだよ」

「ネェ。まあ、あの口の大きいことさ。きっと、蛙の親類か何かなんだよ」

こんな調子です。おお、よだかでない、ただの鷹なら

ば、こんな生半可の小さい鳥は、もう名前を聞いただけでも、ぶるぶる震えて、顔色を変えて、体を縮めて、木の葉の陰にでも、隠れたでしょう。

ところが、よだかは、本当は、鷹の兄弟でも親類でもありませんでした。かえって、よだかは、あの美しい、翡翠や、鳥の中の宝石のような、蜂雀の、兄さんでした。蜂雀は花の蜜を食べ、翡翠は、お魚を食べ、よだかは、羽虫を取って食べるのでした。それに、よだかには、鋭い爪も、鋭いくちばしもありませんでしたから、どんなに弱い鳥でも、よだかを怖がるはずは、なかったのです。

それなら、鷹という名のついたことは不思議なようですが、これは、ひとつは、よだかの羽根が、むやみに強くて、風を切って翔けるときなどは、まるで鷹のように見えたことと、もうひとつは、鳴き声が鋭くて、やはりどこか鷹に似ていたためです。もちろん鷹は、これを非常に気にかけていて、嫌がっていました。ですから、よだかの顔さえ見ると、肩を怒らせて、早く名前を改めろ、名前を改めろと言うのでした。

ある夕方、とうとう鷹が、よだかの家へ、やって参りました。

「おい、いるかい？　まだお前は、名前を変えないのか。ずいぶんお前も恥知らずだな。お前と、俺では、よっぽど人格が違うんだよ。例えば俺は、青い空をどこまでも、飛んで行く。お前は、曇って薄暗い日か、夜でなくちゃ、出て来ない。それから俺のくちばしや、爪を見ろ。そして、よくお前のと比べてみるがいい」

「鷹さん。それは、あんまりです。私の名前は私が勝手に付けたのではありません。神さまが下さったのです」

「いいや、俺の名前なら、神さまから貰ったのだと言ってもよかろうが、お前のは、いわば、俺と夜と両方から、借りているんだ。さあ、返せ」

「鷹さん。それは無理です」

「無理じゃない。俺が、いい名前を、教えてやろう。市蔵というんだ。市蔵とな。いい名だろう？　そこで、名前を変えるには、改名の披露というものをしないといけない。いいか、それはな、首へ市蔵と書いた札をぶらさげて、私は以来、市蔵と申しますと言いながら、みんなの所を、お辞儀してまわるのだ」

「そんなことは、とても出来ません」
「いいや、出来る。そうしろ。もし、あさっての朝までに、お前がそうしなかったら、すぐにでも、つかみ殺すぞ。つかみ殺してしまうから、そう思え。俺は、あさっての朝早く、鳥の家を一軒ずつまわって、お前が来たかどうかを、聞いて歩く。一軒でも来なかったという家があったら、もう貴様も、そのときが、おしまいだぞ」
「だって、それは、あんまり無理じゃありませんか。そんなことをするくらいなら、私は、もう、死んだほうがましです。今すぐ殺してください」

「まあ、よく後で考えてごらん。市蔵なんて、そんなに悪い名前じゃないよ」

鷹は、大きな羽根を一杯に広げて、自分の巣の方へ飛んで帰って行きました。

よだかは、じっと目をつぶって考えました。

（いったい僕は、なぜ、こうもみんなに、嫌がられるのだろう。僕の顔は味噌をつけたようで、口は裂けてるからかなあ。それだって、僕は今まで、なんにも悪いことをしたことがない。赤ん坊の目白が、巣から落ちていた

ときは、助けて巣へ、連れて行ってやった。そしたら目白は、赤ん坊をまるで泥棒からでも取り返すように、僕から引き離したんだなあ。それから、ひどく、僕を笑ったつけ。それに、ああ、今度は市蔵だなんて、首へ札をかけるだなんて、辛い話しだなあ）

あたりは、もう、薄暗くなっていました。よだかは巣から飛び出しました。雲が意地悪く光って、低く垂れています。よだかは、雲と、すれすれになって、音もなく空を、飛びまわりました。

それから、にわかに、よだかは、口を大きく開いて、羽根を、真っ直ぐに張って、まるで矢のように空を横切りました。小さな羽虫が幾匹も幾匹も、その咽喉に入りました。

体が土に着くか着かないうちに、よだかは、ひらりと、また、空へ跳ねあがります。もう雲は鼠色になり、向うの山には、山焼けの火が、真っ赤です。

よだかが思い切って飛ぶときは、空がまるで二つに切れたように思われます。一疋の甲虫が、よだかの咽喉に入って、ひどく、もがきました。よだかは、すぐにそれ

を呑みこみましたが、そのとき、なんだか背中が、ぞっとしたように思いました。

雲は、もう真っ黒く、東の方だけ山焼けの火が赤く映って、恐ろしいようです。よだかは胸がつかえたように思いながら、また空へ昇りました。

一疋の甲虫が、また、よだかの咽喉に入りました。そして、よだかの咽喉を引っ掻いて、ばたばた、もがきました。よだかは、それを無理に呑みこんでしまいましたが、そのとき、急に胸が、どきっとなって、大きな声を上げて、よだかは泣いたのです。よだかは、泣きながら、ぐるぐる、ぐるぐる、空を巡っていました。

（ああ、甲虫や、たくさんの羽虫が、毎晩僕に殺される。そして、その、ただ一つの僕が、こんどは鷹に殺される。それが、こんなに、辛いのだ。ああ、辛い、辛い。僕はもう、虫を食べないで、餓えて死のう。いや、その前に、鷹が僕を殺すだろう。いや、その前に、僕は遠くの遠くの空の向こうに、行ってしまおう）

山焼けの火は、だんだん水のように流れて広がり、雲も赤く燃えているようです。

よだかは、真っ直ぐに、弟の翡翠の所へ飛んで行きました。綺麗な翡翠も、ちょうど起きて遠くの山火事を見ていたところでした。そして、よだかが降りて来たのを見て言いました。

「兄さん、今晩は。何か急の、ご用ですか？」

「いいや、僕は今度、遠い所へ行くからね、その前に、ちょっと、お前に、遭いに来たよ」

「兄さん、行っちゃいけませんよ。蜂雀も、あんな遠くにいるんですし、僕、ひとりぼっちになってしまうじゃありませんか」

「それはね、どうも仕方がないのだ。もう今日は何も言わないでくれ。そして、お前もね、どうしても取らなければならないときの他は、いたずらにお魚を取ったりしないようにしてくれ。ね、さよなら」

「兄さん。どうしたんです。まあ、もうちょっと、お待ちなさい」

「いや、いつまでいても、おんなじだ。蜂雀へ後でよろしく言ってやってくれ。さよなら。もう遭わないよ。さよなら」

よだかは泣きながら、自分のおうちへ帰って参りました。短い夏の夜は、もう明けかかっていました。

羊歯の葉は、夜明けの霧を吸って、青く、冷たく、揺れました。よだかは高く、きしきしきしと、鳴きました。そして、巣の中をきちんと片付け、きれいに、からだ中の羽根や毛を揃えて、また巣から飛び出しました。

霧が晴れて、お日さまが、ちょうど、東から、昇りました。よだかは、ぐらぐらするほど眩しいのを堪えて、矢のように、そっちへ飛んで行きました。

「お日さん、お日さん。どうぞ私を、あなたの所へ連れてってください。灼けて死んでも、かまいません。私のような、醜い体でも、灼けるときには小さな光を出すでしょう。どうか私を連れてってください」

昇っても、昇っても、お日さまは近くなりませんでした。かえって、だんだん小さく、遠くなりながら、お日さまが言いました。

「お前は、よだかだな。なるほど、ずいぶん、辛かろう。今度、空を飛んで星に、そう頼んでごらん。お前は昼の鳥ではないのだからな」

よだかは、お辞儀を一つしたと思いましたが、急に、ぐらぐらっとして、とうとう野原の草の上に落ちてしまいました。

まるで夢でも見ているようでした。体が、すうっと、赤や黄色の、星の間を昇って行ったり、どこまでも風に飛ばされたり、また、鷹が来て、体を掴んだりしたようでした。

冷たいものが、にわかに顔に落ちました。よだかは眼を開きました。一本の若いススキの葉から、露が滴ったのでした。もう、すっかり夜になっていて、空は青黒く、一面の星が瞬いていました。

よだかは空へ飛び上がりました。今夜も山焼けの火は、真っ赤です。よだかは、その火の微かな照りと、冷たい星明かりの中を、飛び巡りました。それから、もう一ぺん、飛び巡りました。そして思い切って西の空の、あの美しい、オリオンの星の方に真っ直ぐに飛びながら、叫

びました。
「お星さん。西の青白い、お星さん。どうか私を、あなたの所へ連れてってください。灼けて死んでも、かまいません」
オリオンは勇ましい歌を続けながら、よだかなどは、てんで相手にしませんでした。よだかは泣きそうになって、よろよろと落ちて、それから、やっと踏み止まって、もう一ぺん、飛び巡りました。そして南の大犬座の方へ真っ直ぐに飛びながら、叫びました。

「お星さん。南の青い、お星さん。どうか私を、あなたの所へ連れてってください。灼けて死んでも、かまいません」

大犬は、青や紫や、黄色に、美しく、せわしく瞬きながら、言いました。

「馬鹿をいうな。お前なんか、いったい、どんなものだい。たかが鳥じゃないか。お前の羽根で、ここまで来るには、億年、兆年、億兆年だ」

そして、また、別のほうを、向きました。

よだかは、がっかりして、よろよろ落ちて、それからまた、二へん、飛び巡りました。そしてまた、思い切って北の大熊星の方へ真っ直ぐに飛びながら、叫びました。

「北の青い、お星さま、あなたの所へ、どうか私を連れてってください」

大熊星は、静かに言いました。

「余計なことを考えるものではない。少し頭を冷やして来なさい。そういうときは、氷山の浮いている海の中へ飛びこむか、近くに海がなかったら、氷を浮かべたコップの水の中へ飛びこむのが一番だ」

よだかは、がっかりして、よろよろ落ちて、それからまた、四へん、空を巡りました。そして、もう一度、東から今昇った天の川の向う岸の、鷲の星に、叫びました。

「東の白い、お星さま、どうか私を、あなたの所へ連れてってください。灼けて死んでも、かまいません」

鷲は、見下したように言いました。

「いいや、とても、とても、話にも、なんにも、ならん。星になるには、それ相応の身分でなくちゃいかん。また、よほど金もいるのだ」

よだかは、もう、すっかり力を落としてしまって、羽根を閉じて、地に落ちて行きました。そして、あと少しで、地面にその弱い足が着くというとき、よだかは、一筋の狼煙のように、空へ向かって飛び上がりました。そして、空の中ほどへ来たとき、よだかは、鷲が熊を襲うときするように、ぶるっと、体を揺すって、毛を逆立てました。それから、キシキシ、キシキシキシッと、高く高く叫びます。その声は、まるで、鷹でした。野原や林に眠っていた他の鳥は、みんな、目をさまして、ぶるぶる震えながら、いぶかしそうに、星空を見上げました。

よだかは、どこまでも、どこまでも、真っ直ぐに空を昇って行きました。もう山焼けの火は、煙草の吸殻くらいにしか見えません。よだかは、昇って、昇って行きました。

寒さで――息は、胸に白く、凍りました。空気が薄くなったため、羽根を、それはそれは、せわしく、動かさなければなりませんでした。

それなのに、星の大きさは、さっきと少しも変りません。つく息は、ふいごのようです。寒さや霜が、まるで

剣のように、よだかを刺しました。よだかは羽根が、すっかり、痺れてしまいました。そして、涙ぐんだ目を上げて、もう一ぺん、空を見ました。

そうです。これが、よだかの最後でした。もう、よだかは、落ちているのか、昇っているのか、逆さになっているのか、上を向いているのかも、わかりませんでした。ただ、心持ちは、安らかで、その血のついた大きなくちばしは、横に曲がってはいましたが、たしかに、少し笑っておりました。

それから、しばらくたって、よだかは、はっきり、まなこを開きました。そして、自分の体が、今、燐の火のような、青い、美しい、光になって、静かに燃えているのを見ました。

すぐ隣りは、カシオペア座でした。天の川の、青白い光が、すぐ後ろにありました。

そして、よだかの星は、燃え続けました。いつまでも、いつまでも、燃え続けました。

今でも、まだ、燃えています。

制作　電書館／なかのたいとう童話の森
2014 年 7 月 2 日版

底本　青空文庫
宮沢賢治 作 『よだかの星』
2011 年 2 月 14 日修正版

NAKANO TAITO